

# 令和7年秋の外国人叙勲受章者(3名)に対する 叙勲伝達式の実施について

令和7年11月3日、日本政府は令和7年秋の外国人叙勲受章者を発表しました。その中で、下記のとおり、台湾から3名の方が日台間の友好関係の増進に顕著な功績があったとして受章されました。

日本台湾交流協会としても日台関係の発展のために長年にわたり献身的な御尽力をされてこられた受章者の御貢献に衷心の敬意と謝意を表します。

## 謝 長廷氏

勲章：旭日大綬章

主要経歴：前 台北駐日経済文化代表処代表

功績概要：日本・台湾間の友好親善及び相互理解の促進  
に寄与



## 受章者のことば

昨年の秋、11月11日に、東京の皇居・松の間で天皇陛下から旭日大綬章を授かる栄誉をいただきました。受勲の背景については、日台友好と「善の循環」を推進することが述べられ、私としても大変感動し嬉しく思いま

した。日台関係の親密さと友好は私一人の功績ではなく、多くの同僚や友人、熱心な方々、さらには日台交流協会の協力の成果です。天皇陛下からのご評価を受け、改めて光栄と喜びを感じました。私とその受勲を代表して受け取ることで、心の中は感謝で溢れています。「善の循環」という言葉は、私が駐日代表に就任した初日に空港で日台友好の相互支援を説明した際に使用したものであり、この数年間広く引用されてきました。もちろん、この概念は京都大学の西田哲学「善の研究」から影響を受けており、私の若い頃の留学経験と無関係ではありません。私は、台湾と日本の両方が地球上の良善の力であり、人助けと恩返し文化を持っていると信じています。相互に助け合った結果、必ず善が生まれ、循環が続くことになると考えます。受勲理由に「善の循環」が言及されているのを見て、非常に嬉しく感動しました！

今回の秋の叙勲で旭日大綬章を受けた外国人は全世界で8名しかおりませんが台湾がその一人を占めることができたことに深い誇りを感じています。歴史上、旭日大綬章を受けた台湾人は4名おり、私は戦後生まれの初めての受章者であり、政党の党首を務めた初の政治家です。そのため、叙勲名簿の発表と授与の翌日、中国から理不盡な抗議があり、日本政府に困惑を引き起こしました。このことに対して心配も感じましたが、日本の内閣や皇室はその決定を変更せず、すべてが予定通りに進行しました。その毅然たる姿勢は、圧力に屈しない精神を示しており、私にとっても非常に敬服すべきことです。

私は1972年(昭和47年)4月に日本の文部省の奨学金を得て、京都大学の大学院で修士号および博士課程を

修讀するために留学しました。宿舎は南禅寺の近くであり、黄昏時には哲学の道を散歩し、生活の問題について悩みながらも、正義や台湾の民主主義について考えていましたが、当時は自分が台湾の駐日代表になり、天皇陛下からの叙勲を受ける日が来るとは思いもよりませんでした。日本での留学経験は、私の台湾の政治改革への取り組みに絶対的な影響を与えました。私が主張してきた民主自決、共生和解、弱者優先、善の循環などの理念は、実際には留学生時代の知見に根ざしています。私が駐日代表に就任したのは平成時代であり、退任する時にはすでに令和6年となっていました。昭和から令和にかけて、日本の政治経済の変化を目の当たりにし、代表として8年余り日本の草の根に関与し、台湾の歴史的絆と民間感情の深さを深く実感しました。そのため、地方自治体との友好協定締結を強力に推進し、この関係を深化させ、多くの成果を上げてきました。先にも述べた通り、日台友好は多くの人の努力の賜物であり、私とその勲章を代表して受け取ることで、恥ずかしさを感じると同時に、使命感が強まりました。

受勲当日、天皇陛下が私のところに来てお祝いの言葉をかけてくださった際、私は心の声を天皇陛下にお伝えしました。「旭日大綬章を賜り、大変光栄に思っております。この栄誉を決して無駄にせず、今後も引き継ぎ、日台友好のために貢献していきたい」、今年の1月6日に「台湾日本関係協会」の会長を引き受けたことで、陛下への約束を早速果たすことができました。「善の循環」の特性を信じて、ますます良くなり、ますます大きくなることが必然であると信じています。そして、最終的には共同体の方向に発展し、相互の助け合いによって共栄を成し遂げ、世界平和の模範となることを願っています。未来に向けて、日台交流協会の皆様と共に努力し、私たちの理想を共に達成できることを期待しています。

## 李 詩欽氏

勲 章：旭日中綬章

主要経歴：元 台湾区電機電子工業公会理事長

功績概要：経済分野における日本・台湾間の関係強化に寄与



## 受章者のことば

片山代表、ご来賓の皆様

大変光栄に存じます。日本政府より昨年11月3日、2025年（令和7年）秋の外国人叙勲者名簿が発表されました。私は電機電子工業同業公会（電電公会）の理事長在任中、日本と台湾間の経済分野における関係強化に貢献したとして、「旭日中授章」を授与されることとなりました。まず、日本台湾交流協会台北事務所の片山代表の推薦に感謝申し上げます。また、電電公会の理事・監事および職員の皆様が、経済部の指導の下、台日間の交流と協力を積極的に推進してくださったことに感謝いたします。

経済部の龔部長は、今年2月5日の「年末記者会見」において、1)台湾の2025年の経済成長率が8.63%となり、15年ぶりの高水準を記録したこと、2)台湾は「五大信託産業」を推進し、AIおよびサプライチェーンのレジリエンスを強化していること、3)台湾は地政学的対立に直面しつつも、産業のグローバル展開を加速し続けていることを述べました。これらの成果と取り組みには、台湾ICT産業を代表する電電公会の尽力と貢献が不可欠でした。龔部長はさらに、台湾経済が世界的な関税の嵐やサプライチェーンの再編を経て、2026年に「守りから攻めへ」の転換期を迎えることを明らかにし、施政の重点と将来展望は、台湾を「経済という太陽が沈ま

ない国（経済日不落国）」にすることに焦点を当てていると述べました。龔部長の「守りから攻めへ」という戦略的指針の下、台湾と日本の関係はかつてない好機を迎えることになりました。

経済部傘下の「台日産業協力推進室（Taiwan-Japan Industrial Collaboration Promotion Office - TJPO）」は、2012年3月（約15年前）に設立され、現在に至るまで経済部唯一の産業推進室となっています。台湾の他の主要パートナー国には同様の機関が存在しないことから、経済部における台日協力の優先的な位置づけがうかがえます。TJPOでは、産業発展署の邱求慧署長の指導の下、本年2月20日に高市首相が第221回国会で実施した再任後初の施政方針演説の内容を網羅的に整理しています。高市首相は、特に産業発展における経済刺激策の3本柱を推進することを表明し、その規模は21.3兆円（1420億米ドル相当）に達します。産業推進のための17の戦略分野と8つの分野横断的課題があり、TJPOはこれらすべてについて台湾が積極的に協力する計画を策定しています。電電公会も積極的に協力・推進していく方針があります。

工業技術研究院の呉政忠董事長は、国家科学技術委员会主任委員在任中、台湾の半導体製造の強みと日本の材料・設備の強みを融合させることに尽力しました。対外貿易発展協会の黄志芳董事長のリーダーシップの下、「台湾エキスポ（日本台湾形象展）」の開催や大阪万博「TECH WORLD館」の出展がなされました。電電公会の「AIIA（AIイノベーション応用）連盟」会長である徐爵民氏は、元科学技術部長兼工業技術研究院院長であり、日本の研究開発機関（AISTなど）との技術連携を推進しています。これらの方々は、長年にわたり、それぞれの立場で台日間の交流と協力を推進し、尽力されてきました。

本日は、インベンテック（英業達）・グループ創業者である葉国一会長をお招きし、台日交流の栄光の瞬間を共に目撃できることを大変光栄に思っています。葉会長が率いるインベンテック・グループは、昨年創立50周年を迎えました。皆様もご存知の通り、葉会長は台湾のICT産業において卓越した地位を占めていますが、葉会長が「台湾日本研究学会（略称：台日学会）」の設立を支援されたことは、あまり知られていないかもしれません。1972年の台湾・日本国交断絶後、台湾の有志たちは1979年に「台日学会」を設立し、学術研究、人材育成、そして民間交流の架け橋としての役割を果たしてきまし

た。「台日学会」で数期にわたり理事長を務めた許水徳院長は、1991年から1993年まで駐日代表を務め、1992年には「亜東関係協会駐日代表処」を正式に「台北駐日経済文化代表処」へと改称しました。「台日学会」の許水徳理事長は、2015年春に「旭日大勲章」を授与され、この最高位の勲章を授与された元駐日代表としては初めての人物となりました。長年にわたり「台日学会」を支援するため、葉会長はインベンテックに「中日文教基金会」を設立し、現在に至るまで「台日学会」の運営に対する資金援助と支援を専門的に行っています。

電電公会の劉揚偉理事長は、米国シリコンバレーで本日開幕する年間最大のAIイベント「Nvidia GTC（GPU Technology Conference）」へ参加する必要があったため、本日の式典には出席できませんでした。劉揚偉理事長は、昨年の就任時に「類科学園区（またはTEEMA科学園区）」という戦略計画を提唱し、地政学的な情勢やグローバルサプライチェーンの再編に対応し、台湾の中小企業の国際展開を支援しています。この戦略は行政院から重視され、台湾・米国間の対等貿易協定（Agreement on Reciprocal Trade, ART）の中核的な内容の一つともなりました。

私が電電公会の理事長を務めていた間、経済部が推進する「経済日不落国」の構築を支持しました。「国際的なTEEMA」イニシアティブを提唱し、台湾のICT産業チェーンが北米、EU、インドなどの市場へ展開することを推進しました。先週、「日本台湾交流協会」に対し「台日AIイニシアティブ」を提案しました。これは、台湾のICT産業の日本への展開を推進し、AIデータセンターにおける台日間の相互投資を促進し、AI計算能力の構築を加速させるものであり、またTSMCなどの半導体産業と共に日本へ投資し、上流から下流まで全面的なサプライチェーンを形成することを目指すものです。このイニシアティブは、高市首相の半導体およびAI政策に基づき、デジタルインフラの整備を通じて投資とイノベーションを促進し、収益拡大という好循環を生み出すものです。この政策は特に、インフラの強化およびAIのイノベーションと応用を重視しています。そして、AIデータセンターの構築を加速させることは、まさに最重要課題であり、一刻の猶予も許されません。

「台日AIイニシアティブ」に加え、私は「台日医療技術プラットフォーム」および「台日文化・音楽プラットフォーム」の推進にも取り組んでいます。これらのプラッ

トフォームを通じて、視察や相互訪問イベントを開催し、医療技術および文化・音楽分野における台湾と日本の交流強化に取り組んでいます。

今年2月2日、片山代表がテレビの単独インタビューを受けた際、台湾の人々に伝えたいメッセージを問われ、片山代表は「台湾駐在の2年2ヶ月の間、台湾が日本にとって極めて重要なパートナーであり、かけがえのない友人であることを確信しました。この確信と実感は、毎日のように感じていることです」と述べました。台湾の皆様一人ひとりが、片山代表のメッセージを深く心に刻み、深く感動されたことと思います。

今年の新年カウントダウン動画で片山代表夫妻が述べた祝辞を借りて、私たち一同、「台日間の友情がさらに深まること」を願いましょう。皆様、ありがとうございました。

## 黄 崑虎氏

勲章：旭日小綬章

主要経歴：台湾之友会全国総会長

功績概要：日本・台湾間の友好親善及び相互理解の促進に寄与



## 受章者のことば

この度、旭日小綬章を受け賜る事は、自分にとって最高の光栄と存じます。私は、昭和七年生まれで、中学一年まで嘉義中学校で日本の教育を受けました。短い七年でしたが、この尊い時間で身についた教養は、私の一生を導き、正確な方向に進んで行ったと信じています。

李登輝友の会時代、日本育桜会会長の園田天光先生より台湾への日本の河津桜一万本を贈呈下さるお話がありました。李登輝総統お立ち会いのもと、盛大な贈呈式が台北の国賓大飯店で行われ、日本の河津桜は十年に渡り、台湾全土各地で植樹されました。今では、春になると花が咲き誇り、台湾の人達を楽しませています。

九十代になった私は、人生を振り返り見て一番嬉しいことは何ですか？と聞かれますと台湾全土に日本の桜を植えた事だと言いたいです。桜によって芽生えた日台両国の友情は、2011年東日本大震災が起こった際、台湾友の会のもとに多くの救災物資が届き、即座に送って欲しいとの要請が殺到し、多額の義援金も受け取りました。これも桜の植樹が両国の友情の架け橋になった事と信じて止みません。このような助け合いは、世界の平和につながる事と信じています。

私は、その時代に生きた台湾人としてなすべきことをしただけに過ぎません。今日、このような立派な賞を多くの台湾の人達を代表してお受け致します。